



子、親ともに秋田県産ファン

まだ6月だというのに浅黒く日焼けした体格のいい男たちがワゴンの車内でひしめき合っていた。車は秋田県横手市を出発し、神奈川県相模原市の市立大沼小学校(596人、久保田賢司校長)を目指して約600kmの道のりをひた走った。

男たちはJA秋田ふるさと青年部の部員10人。田植えなど農作業体験を通して食や農に理解を深めてもらう「出前授業」は同小5年生の求めに応じた3年半前、この車中泊1泊3日の強行軍で始まった。

出前授業は今年度、教育ファーム活動として行い、5年生に4年生を加えた児童約220人と親たちが参加した。遠距離のため出前回は6月に田植え、11月に収穫、翌2月に交流会の3回。半日程度で回数は少ないものの、部員1人が6、7人の児童をみる少人数制の「弟子入り制度」が機能しており、弟子である子どもたちが師匠である青年部員の顔を必ず覚え、打ち解ける関係づくりが今回うまくいった。事前に参加部員がビデオレターで自己紹介していることも、訪問回数の少なさを補っている。



今年度は花壇を転換して、田んぼは前年までの5倍の計2500平方メートル。田植えは全員で土の入れ替えや耕起、施肥などを行った。代かきでは、裸足で泥だらけを競うようにして水が流れ込む区画を歩き回る子どもたちの姿に、親たちも「子どもたちのこんな輝いている瞳を初めて見ました」と喜んだ。

収穫では手刈りした稲をはさがけし、稲の残さなどは田んぼにすき込んだ。脱穀は全員が経験できるように、飲み終えてよく洗い、乾燥させた牛乳パックを活用。数本の稲をパックに差し込んで口を閉じ、丁寧に抜き取るパックの中にもみが残る仕組み。子どもだけでなく親に好評だったのは青年部が持ち込んだ「あきたこまち」の新米のおにぎりだ。今回は家庭科室に入りきれないほど集まった親たちのうち約30人が協力してにぎった。

TOHOKU

# 「都会っ子」にまいた農の種。今しつかりと芽吹き始めた

往復約1200\*km、20時間かけて子どもたちに出前するのは稲作の授業。「草の根かもしれないけど、農家が主体的に日本の農業を守っていく未来への投資だ」



地の学区で、一連の作業を体験した親自身が成就感を得たことや、子どもたちの成長ぶりを実感しているからだ。家庭での会話が増え、朝食を「パンからご飯に変えたい」「買物の時には「秋田産を探して」などと言われるという。ある親は「家の食事で茶碗にご飯粒が残っていると、「秋田のお兄ちゃんたちに悪い。ちゃんと全部食べて」としかられる」とうれしそうに話した。

### 農家の主体的な未来への投資

「今度は秋田に行ってみよう」「いつでも遊びにおいで」。そんなやりとりもあるし、産地のPRにもなる。今度も交流の広がりが見込めるからこそ、この6月から1年間は神奈川県に駆けつける予定。学校側で中心的に携わってきた齋藤浩教諭は「部員の皆さんの骨がばさばさ新鮮だった。できることならみなさんとのつながりを手放したくない」と望んでいる。

その先は行政やJAの支援が欠かせないなど課題はあるものの、参加した部員全員で一致しているのはこんな思い。「草の根かもしれないけど、農家が主体的に日本の農業を守っていく未来への投資だ。遠くない将来に大きな効果が表れてくると確信している」。

### 青年部組織も元気に、若い部員ほど「化ける」

出前授業は青年部組織の活性化にもつながった。今年度、毎回参加した部員数は1年目の3倍近い。50人の応募から面接を通過した27人。菅谷亨部長は「未来の消費者に真摯(しんし)に接すること。米のことを、秋田のことをより深く知ってもらいたい」という強い気持ちで大事」と言う。

参加する部員は子どもたちの師匠だ。農業を自分の言葉で伝えるプレゼンテーション能力がある。子どもたちのやりとりを経ると、自信をつけ、感動し、帰りに思わず涙ぐむ部員もいる。若い部員ほど「化ける」といい、成長が著しいという。部員がJA活動や普段の営農に取り組み姿勢は真剣味が増している。

合併JAの管内は米や野菜、果樹など多品目で、部員間の年齢差は30歳にもなる。往復約1200\*km、20時間の道のりは、部員同士が多様な経営や年代から学び、尊重し合う関係



農林水産省では、各農政局で教育ファームの推進をサポートしています。詳細は、お近くの農政局の窓口までお問い合わせください。  
東北農政局 消費・安全部消費生活課  
〒980-0014 仙台市青葉区本町 3-3-1 ☎022-263-1111 (内線 4318)

教育ファームに関心のある方、地域を盛り上げる次の一手をお探しの方農林漁業体験のポータルサイト「教育ファームねっと」に今すぐアクセス!!

教育ファームねっと

検索

「教育ファーム実践ファイル」(64種類)や「ワークシート」(235種類)も無料ダウンロード配信中!

事務局

農文協

〒107-8668 東京都港区赤坂 7-6-1  
(E-mail) f-edufarm@mail.ruralnet.or.jp

各エリアの事例は日本農業新聞公式サイト「e農ネット」でご覧になれます。  
<http://www.nougyou-shimbun.ne.jp/>